＜紹　介＞

J・カルミッチェル著『カール・マルクス』

J. Carmichaels, Karl Marx

別　府　芳　雄

（I）

昨年の師走偶然にみつけたジョエル・カルミッチェル著『カール・マルクス』（1967年版）を紹介する。まだ邦訳はないようである。表紙のクララ・アイヒの紹介によると，カルミッチェルはニューヨーク市の生れ。イギリスのオックスフォード大学を卒業ののち，さらにフランスのソルボンヌ大学やニューヨークのコロンビア大学に学び，第2次世界大戦中は海軍士官として戦略研究機関に勤務していたが，戦後数年間は海外生活を送っていた経歴の持主である。氏は著作家としてのみならず，編集者としても有名でスクハノフ著『ロシア革命』(1917年)，テオドール・ダン著『ボルシェヴィズムの起源』のような名著を飜訳して出版している。また彼自身，『図解ロシア史』『小ロシア革命史』『イエス・キリストの死』『アラビア人の造形』などの著書がある。氏はニューヨーク市に居をかまえて，目下は1930年代のモスコー裁判と粛清の研究に多忙をきわめているよしである。

ことマルクスにかんすることになると理論はもちろん伝記にしても抽象的な「霧のかかった」ような哲学用語がやたらに混入して初学者を煙にまいてしまう著作が多い折柄――こんなに充実した資料を用いて具体的に解りやすく説明している本は珍らしい。カルミッチェルは編集者としても有名といわれているだけに，手の込んだ，じつにヴィヴィドな描写で，まったく力作という以外はない。

（II）

カルミッチェルは数多くあるマルクス伝に対して，本書のもつ意図をその序文で鮮明にする。すなわちカール・マルクスはこれまで生存した人物のうちで，もっとも後世に影響をおよぼした人物の一人に違いないのだけれども，アレキサンダー大王とかイエス・キリストとかマホメットとか釈伽のような偉大な人たちの――彼らの名前にまつわる大事件とのやや偶然的な関連を重視しないで，さらにマルクスが

彼自身の著作や彼個人の活動を通じて多大の影響を及ぼしているということを想起すれば――マルクスの役割はユニークなものであると認めざるをえない。そしてマルクスの思想はその思想を信奉する人びとによるその思想の応用によって人類にもっとも広範な影響をもつのみならず，一般に学問上におけるその影響力の点においても多くの分野ことに歴史や社会科学においてはとくにそうだが，並々ならぬ重大な役割と位置とをもつものである。さらにマルクス主義的傾向は国際社会主義運動のなかでも，もちろんいまや顕著な潮流となっている。――すなわち，その流れの一つをあげれば――ロシアのボルシェヴィズムは大国で実権を掌握して，他の大国たとえば中国が社会主義的方向をめざして進むのを援助した。マルクスの影響はマルキストたちが彼ら独自の方法で作りあげている数多い政党や運動や組織のみに限られているものではない。疑いもなく，こんにち人類のおよそ半分はマルクスの思想のいろいろな解釈の直接の影響下にあるわけなのだが，本書はマルクス個人の描写より以上のものを企図したわけのものではない。伝記作者はしばしばマルクスの生涯をマルクスの力づよい思想のたんなる付属品のように扱うものであるけれども――わたしはむしろその反対であることを，あえて解明しようと思ったのである。わたしはマルクスの思想を彼の生涯と関連があるかぎりでだけ取りあげ，彼の個人的影響のその後の，あるいはより外的な現われ――それは事実上無限なのだが――については示唆するにとどめた。わたしは風変りな闘争を実践する個人の論証をやってみた。その闘争の方法はきわめて個性的なものであるからして，これまでは闘争の結果がほとんど見きわめることができなかったほどである。これらの結果としてマルクス個人が化石化してしまっている。すなわち「琥珀のなかの化石蝿」(fly in amber) のようにわれわれに映るのである。わたしはマルクスが埋められている神話の山からマルクスを効い出そうとした。そしてマルクスを生きている人物として描写しようとした。わたしのこの接近がマルクスの思想の理解にとってもまた，みのりあるものであることを期待していると。

この序文からカルミッチェルが従来と変った没イデオロギー的伝記を描こうとしているのがわかる。本書はマルクスの人柄，マルクスの家庭，マルクスの環境を赤裸々に痛々しいほどリアルに描きだして読者に正確なマルクスを――しかも，その個人に重点をおいて――伝えようとしている。読者は従来のリープクネヒトだの，ラファルグだの，エレアノールだの，メーリングらの『マルクス伝』や，さらにはエンゲルスやレーニンやルフェーブルやリヤザノフや，わが国のマルクス主義経済学者らの『マルクス伝』が本当のマルクスを伝えていると信じているのではないだ

—うか？　これらのマルクス主義者たちによって「神話」化されたマルクスはわれわれの現実の視野から程遠い教祖として描かれているにすぎないではなかろうか。われわれはもっとヴィヴィドな苦悩する人間マルクスを理解してもよいのではなかろうか？　そうすることがマルクスをもっとよく知ることになるし，あたかもわれわれが友人の性癖，生き方を知りつくしたような意味での人間マルクスの全体像を再現し，そのうえで改めてマルクスの偉大さに接してもよいのであろう。カルミッチェルの意図もまさにここにあるのであり，紹介の意義もここにあろう。

（Ⅲ）

本書の構成は８章に分れている。

第１章　幼年期・青年期
第２章　知性の目ざめ，ヘーゲルと青年ヘーゲル学派
第３章　ジャーナリズム・社会主義への転向・パリ時代
第４章　マルクスの社会主義者としての成長
第５章　亡命への道，1848年，ベルギー時代
第６章　岐路，亡命と衰弱
第７章　実践への復帰・理論の完成
第８章　終章・晩年

この構成をみると，単なる歴史的叙述のようなマルクス伝を想起するかもしれない。しかし，この過程の背後にあるマルクスの個性的闘争の発展を跡づけて述べているのだから伝記というよりはマルクスの個性的闘争のあとづけというべきであり，あらゆる資料を駆使して描いた生々しいマルクスの残酷なほどのスケッチなのである。以下この点に関しカルミッチェルの特徴的な叙述を若干あげてみよう。

（Ⅳ）

まず，パリ亡命時代における特徴的事件についてマルクスの性格を浮き上がらせるためにカルミッチェルは次のようにのべる。すなわち，マルクスのパリ滞在の２ケ年間の基本的活動は批判的スタイルといわれるものを確立したことだ。以前の同僚ルーゲに対する冷酷な激しい攻撃にはじまり，青年ヘーゲル学派の彼の昔の仲間にたいして体系的な攻撃を続けながら，マルクスはヘーゲル研究から継承したいくぶんこじつけぎみの哲学的スタイルを物凄い武器にまで作りかえた。その武器は鋭いメスの分析や巧妙な剣さばきの風刺をもち棍棒的要素をそなえているものだっ

た（p. 101）。そしてマルクス個人も，いま悲劇といっていいようなものを体験していた。つまり彼の最愛の妻イエニーが娘を生んだとき，ほとんど死にかけていたのだった。それほどの苦境のなかで，マルクスはおびただしい経済資料との闘いをはじめ，彼が作ろうとしていた広範囲の歴史的テーゼを社会・経済的に実証しようと努力していたのであった（p. 101）。マルクスはバウアーを完全に破壊してしまうことに恐るべきエネルギーを投入した。無責任のためバウアーの本が完全に発禁になり，いまやバウアーが絶望的なほど貧しく，希望のない状況におかれているという噂を耳にしたときでも，マルクスはバウアーの書いた全8巻の論文を骨折って吟味するのに没頭した。こうしてマルクスは人民の全グループのための象徴（バウアー）を攻撃した。しかし彼は批判的な憤怒にふかくはまり込んで，いまやバウアーに対して何の顧慮もしなかった。バウアーをずたずたに引裂くのに非常に夢中だったのでエンゲルスの貧弱なスケッチを，小論文からおよそ350ページの厚い書物に拡大した。それは26才のマルクスにとって注目すべき体験・最初の著書であった。マルクスはそれを直接ドイツの印刷屋に売り込んだ。その印刷屋は「ライン新聞」失敗の犠牲者としてすでに知られているマルクスの名前と著名なエンゲルス家のコンビだからライン州でよく売れるに違いないという考えにもとづいて表紙の著者名にエンゲルスの名をマルクスより優先するように頑張ったという。その著作があまりにも苦心作であり，信じがたいくらいに誇張した批判を含んでいるので，エンゲルスはその本すなわち「ブルーノ・バウアーとその一派に対して」という副題をもつ『神聖家族』にかんしては，あまり熱心ではなかった。その理由は，ことに表題がまちがいなく彼の敬虔な家族を苦しめるであろうし，それ以上に彼が実際のところ，その本の一行も書いていなかったという理由によるものであると（pp. 102—103）。

（V）

また終章ではカルミッチェルは次のような事態を特徴としている。54才になったとき，マルクスは全く老いこんで安らかな生活に面していた。マルクスはバクーニンやラッサールよりも長く生きてすでに『資本論』は出版されていて充分な所得もあった。しかし外見上はすることがないようだった。インターナショナルが彼の最後の大きな企図だった。インターの崩壊以来，彼の人生は空しくなったのである。彼の考えは受け入れられなかった。反対にドイツではマルキストからなる2つの労働者政党があり，そしてたとえリープクネヒトがマルクスと文通をしていたが，彼やほかのどの指導者だってマルクスの意見を聞こうなどとしなかった。イギリスで

は労働者階級運動が全く反社会主義的だったからマルクスの助言など必要もなかったのだ。1875年にはマルクスの苦境はピークに達していた。もとをたどればラツサールとの喧嘩のために分裂してしまっていたところの2つのドイツの政党はその年つぶれたのである。マルクスとエンゲルスは新聞でそれを知った。2つの政党は合同して社会民主党をつくったが，マルクスもエンゲルスも綱領の起案に協力したり寄稿するように求められることもなかった（p. 242)。1875年には事実上，マルクスとドイツ労働者階級運動との間には，なんら現実的なつながりもなくなってしまっていた。マルクスはハッキリと世間から孤立してしまっているのを感じた（p. 243)。『資本論』の残り2巻の草稿が残されたままになっていたが，何の興味もなかった。疑いもなく，その主な理由の一つは，マルクスの積極的な主張にもかかわらず，彼の予言がひどく的をはずれてしまい，それが不快の原因といわれる内部のフラストレーションの原因になってしまっていることが，いまやハッキリしたからである（p. 243)。資本主義はマルクスの予言した何らの兆候さえも示さなかった。貧困は増大せず，人びとの暮しはよくなり，労働者の生活状態は以前よりはグンとよくなった。〔窮乏化〕の分析にもとづいてたてられたマルクスの戦術はいつも間違っていたということが解った。（p. 244）マルクスは社会主義が暴力でもたらされねばならないという彼の主要命題の一つを否定していた。1972年のハーグ大会の席上で（それはインターナショナルの事実上終焉となった大会であるが）マルクスはイギリスやアメリカのみならずオランダの労働者の平和的革命達成の可能性についてはのめかしたりした。彼はタッタ1回だが，こんなこともいったのだ。マルキシズムはいまや科学となり，徐々にヨーロッパの若い人たちによって研究されていたので，彼の思想の研究者たちは彼に説明を求めてきたものだったが，これがマルクスのイライラのもとだった。「私の解っていることといったら――私がマルキストじゃないということだ」という，彼の有名な皮肉をまじえた暴言になった（p. 244)。ドイツ社会民主党は方針をかえてしまっていた。だがマルクスにはどうにもしようがなかった。マルキシズム政党はイギリスにもフランスにも見出すことができなかった。ロシアはずっと遠国だったし，とにかくマルクス自身はこれらの出来ごとには何の影響も与えることができなかった（p. 244)。彼自身の思想への失望は読書の量が増すにつれて，いくぶん薄らいだ。読書の量が増すにつれてマルクスはあまり書かなくなった。彼は新しい外国語さえ学ぼうとした――トルコ語さえも。家庭はマルクスの最大の慰めだったが，その家庭はだんだん減っていった。3人の娘は次々とみんな彼のもとを去っていった。長女のイエニーはフランスのジャーナリストに嫁いだ。ポール・ラフアルグの妻・ローラは夫の寄行などのために自殺してしま

うほどの苦悩の生活に吹き流されていった。エレーナは英人エーヴェリング博士と同棲していた。この男は倒錯症で――エンゲルスは犯罪者みたいな奴だといった――結婚しないで同棲していた。この娘もまた自殺する運命におかれていた。いつも子煩悩だったマルクスは，むろん娘たちの不幸によって悩まされた。マルクスの健康は再び悪化しはじめた。1881年マルクスが63才で妻イエニーが67才の時，彼女は癌にかかった。彼女が苦痛にみちた臨終の床についているとき，彼は肺炎と助膜炎の併発のため隣室に横たわっていなければならなかった。イエニーは1881年〔12月2日〕に世を去った。エンゲルスがいったように，いまやモール（マルクスの愛称）もまた死んだと（p. 246）。マルクスはその後2年間も生きのびていた。彼は太陽を求めて地中海に送られたが，その冬は湿っぽくて不快なものだった。ロンドンに帰って間もなく，長女の急死の通知に接した。この通知は彼が2度と立ち直れないほどの痛撃だった。1883年3月14日，肺膿腫のため忠実な下婢ヘレン・ラムートにみとられながら，彼は安らかな眠りについた（p. 246）。たった8人だけが葬式に参加しただけだった。娘婿がパリからはるばるやって来た。リープクネヒトはドイツからやってきた。ロンドンのハイゲートの墓地でエンゲルスの葬送の辞がマルクスの不滅の業績にたいして捧げられた。「現存最大の 思想家は 考えることを止めた…。」ところがマルクスの死はほとんど注目されなかったのだ。ロンドン・タイムズに印刷されたその報道は奇怪にもフランスの社会主義新聞を読んだパリの特派員からきたものだった（p. 247）。

筆者は不勉強のためか，未だこれほど赤裸々な痛々しいマルクスの描写に接したことがない。著者の筆鋒は残酷というくらいマルクスの惨めな苦悩の生涯を剔るように描写している。本書には，救いというものがない――これが本書を読み終えたのちの感想である。